

Governor's Message



はじめに東日本大震災でお亡くなりになった方々に心より哀悼の意を表します。

2003年にアメリカ大陸以外では初めて、米国内科学会 American College of Physicians (ACP) の Japan Chapter (日本支部) が設立されました。私はその前から認定内科専門医を ACP の Fellow にという ACP からの提案を受けて、認定内科専門医会 (現、日本内科学会専門医部会) として Fellow を推薦していた関係で、ACP 本部との交渉に初めから立ち会ってきました。最初は国外には支部はおかないという原則論で絶対無理と言われた日本支部を開設にこぎ着けることが出来たのは初代支部長の黒川先生の剛腕のおかげです。現在では支部発足当時約 300 名であった会員数が 1,000 名を超え 3 倍以上になりました。また、医学生や研修医など若手会員が 20% を占めるまでになりました。これは他の米国の ACP 支部では考えられない驚異的な増加率ということで本部から賞賛され今年のサンディエゴでの ACP 支部長会議で黒川支部長が優秀支部賞を受けられました。2002 年に京都で開催された第 26 回国際内科学会議の会長講演で黒川先生は「Globalize the Evidence; Localize the Decision」というメッセージを発信されました。それに似たもので、「Think globally, Act locally」という言葉があります。単に国際的に広い視野を持って地域で活動するだけでなく、多様な考えも受容できる広い心を持ち、実際に足が地に着いた活動をしろという意味だと解釈しています。日本にも多様な人がいると言われるかもしれませんが国際的に見れば日本はかなり均一化された社会です。この多様性を受容し視野を広げるために ACP に参加することはとても効果的です。私が初めて米国の ACP 年次講演会に参加したとき、Fellow 称号授与式 (Convocation Ceremony) の盛大さにも驚きましたが、もっと感心したのは学会運営そのものでした。プログラムは総合内科医を主とする ACP 会員の生涯教育という明確な目標に沿って構築されており、殆どすべてが多彩な教育講演と実践的教育プログラムでした。医師免許も更新制で生涯教育 (CME) 単位を取らないといけない米国と終身免許制の日本では臨床系学会のコンセプト自体も異なっているのは当然かもしれませんが、見習うべき点も多く感じました。その一つが 2010 年度の第 107 回日本内科学会講演会で取り入れた実践的生涯教育プログラムです。「一会場一講演」主義を伝統としてきた日本内科学会で初めて、総合内科専門医が中心となって内科救急・ICLS 講習会 (JMECC) をはじめイチローなどを使ったシミュレーション教育、感染症や認知症実践教育などを取り入れ大変好評でした。日本内科学会認定制度審議会長の頃にトレーニング問題を生涯教育に取り入れましたが、ACP の MKSAP に比べると大きな差があります。日本でも米国の臨床教育を外見だけ見習って新卒後臨床研修制度が導入され、少しは進歩しましたが、国試の抜本的改革もなく、研修の質の評価やアウトカム設定も不十分なままであり、米国のレジデント教育とは大きな差があります。私は文科省の GP で 140 名以上の島根大学の医師、医学生等を 20 回近くに分けて米国などの地域医療教育に熱心な大学医学部に短期派遣し、また同行し、教員だけでなくレジデントや医学生の日常を体験し、話を聞いてきました。先進的な米国の臨床研修を体験することにより、みんなが「Think globally」となってくれることを期待したのです。この時、受け入れ先を探して交渉する際にお世話になったのが

ACP 事務局の Eve さんでした。デンバーの Dr. Gibbons, ワシントン州立大学の Paauw 教授(後に ACP ワシントン州ガバナー)など多くの ACP メンバーに助けられてこのプロジェクトは成功しましたが, このようなアイデアも ACP の活用という意味で取り入れて行ければと思います。また, ACP 日本支部は総合内科専門医が ACP Fellow になっていたという経緯から日本内科学会に大変お世話になっています。専門医部会が担当してくれた実践的生涯教育プログラムのモデルなど ACP の優れた点を活用しながら, 今まで以上に日本内科学会との連携を大事にしていきたいと思います。東日本大震災の影響で今年度は中止となりましたが, 毎年の ACP 日本支部年次総会・講演会なども今後自立して行うことを考えていく時期に来たと思います。今後も魅力ある活動を通じて「Think globally, Act locally」を実践する仲間が集まり若者の夢をかなえるような ACP 支部を目指して努力したいと思いますのでよろしくお願いします。

2011 年 4 月 11 日

Outgoing Governor's Message

政策研究大学院大学 教授 黒川 清

支部長を退任するに当たって: 皆さんありがとう



ACP 日本支部を例外的に 2 期 8 年務めさせていただきました。この 8 年間で日本支部は本部の多くの注目を集めるほどに成長をしました。

これは会員の数だけではありません。いくつもの会員同士による自発的な活動を立ち上げ, それらが主体的に活発に運動を進めていたことがとても大事だったしそのことが, 本部や米国の多くの支部からも好意的に受け止められ, 色々な表彰を受けたことは本当

Photo: Tetsuo SAKUMA にうれしいことです。

日本で開催される年次講演会には, 殆んど毎年のように ACP の会長が参加され, これも大きな励みになりました。

私個人としては, 15 年の米国生活の後で帰国してから, これから大きく変わりつつある世界で, 若い人たちの交流を広げることがとても大事と考え, 機会あるごとにそれを学生や若い医師たちにすすめ, 機会を作ることに努力してきたつもりです。

米国内科学会の支部を作ることが可能なのか, 機会あるごとに ACP 幹部と議論の機会を持ち, Philadelphia の本部へも出かけました。そうこうするうちに私も ACP の Master に推挙され, 国際腎臓学会, 国際内科学会などでも理事などとして運営にかかわるようになりました。

その間にも私は東京大学から東海大学へ異動し, さらに多くの内科医とも知己を広げることができ, また当時東海大学で教鞭をとっていた上野文昭先生とも知己を得るようになりました。もっとも, 上野先生のお父様は私の医局の先輩で, 私が若いときにずいぶんと薫陶を受けたものです。

その間にも, 世界の動きは目ざましく変化し続け, 私も国内外で色々な責任を負わされる羽目になってきました。国内では文部省, 厚生省, また日本内科学会, 日本腎臓学会など, また国際舞台では国際内科学会, 国際腎臓学会ばかりでなく, WHO, JICA などとも仕事をし, 世界の動きを身をもって経験する機会が大きく増えました。途上億支援プログラム, また, 英米欧州での医学教育改革, 健康・医療政策改革の動向にも関与し, 見聞きする機会も増えました。

2002 年の京都での第 26 回国際内科学会議を開催するようになったのも, 日本の状況, 変化して行く国際社会といった背景があったからでしょう。

このような背景があつて、ACP の日本支部が開設されることになりました。日本内科学会も、認定医師・専門医資格などが議論され、導入されるようになりまして、そこで内科専門医(現在の総合内科専門医)の資格のある方達が会員になる資格としました。これも交渉です。

このような「プロ」としての社会への責任を果たそうという世界の動きを、将来を担う若い内科医達の実感できる、感じ取れる「場」として機能することをひとつの大きな目標と考えていました。

毎年の学術講演会などは 1 日の日程ですが、日本内科学会のご支援もいただきながら、開催され、ACP の会長もほぼ全部に参加されました。

また、会員が自発的に色々な活動を始めました。Ann Int Medicine の翻訳事業、Professionalism の推進、Volunteerism の推進、女性医師の活躍への取り組み、若手医師や医学生の臨床教育や研修への取り組み、内科医の精神疾患研修などなどです。これらの活動は本部でも高く評価されており、いくつもの受賞をいただくことになりました。

会員数も毎年増え続け、また経験豊かな会員が多く Fellow に推挙され、また Master になられた方も出ています。ACP 年次講演会では「日本支部」の活動、さらに Convocation に参加して、良い意味での内科医の自律するという意識を体験をした方達も多いと思うし、また毎年の日本支部のレセプションにも支部会員ばかりでなく多くの方々に参加いただき、日本支部との交流、親睦に貢献していただきました。

この間、異例のことだが、あつという間に 4 年の任期が来てしまったが、特例として私がさらに 1 期、支部長を務めることになりました。

この 8 年間、皆さんの活動で支部は会員数ばかりでなく、活動の内容、展開など、会員皆さんの自発的な行動で大いに発展し、ACP の中でも、認められる存在になってきたことは本当にうれしいことです。しかし、これらは会員皆さんとそれぞれ大きなリーダーシップを発揮してくださった多くの会員の皆様のおかげであり、心から感謝しています。

また、上野文昭副支部長には、わたしが忙しさにかまけて欠席がちであった ACP 年次講演会と、そのときに開催される理事会、また秋の支部長会議などにも皆勤され、私達支部の存在を大きく示していただいたことは、私個人として心からお礼を申しあげる次第です。このような機会に友人の輪を広げることは、特にグローバル時代にあつては、日本の将来を担う内科医への信頼の構築、さらに温かい目で応援してくれる気持の醸成にとってもかけがえのないことであり、本当に感謝しつつてもし尽くせないです。

また、事務局を担当してくれた宮本さんの存在は、誰でも代替のできることではない仕事を本当にスムーズに遂行してくれました。本当に皆さんに代わって、心から御礼します。

最後に、支部の活動を支えてくれたのは会員の皆さんであり、また多くの活動を提案し、それぞれが出来るところから活動の輪を広げてくれた皆さん、そして多くの ACP 会長をはじめとした執行部と事務方には感謝の念に絶えません。特に Dr. Gremillion は毎年の支部年次講演会で「一目瞭然」という、「症例謎解き」という臨床の醍醐味を皆さんと共有させて下さり、一流の臨床医がいかに後輩の教育に熱心か、ということを見せてくれた「一流の指導者」のロールモデルであり、皆さんへの励ましのメッセージをいただいたことに、心から感謝の気持ちを、会員一同に変わって御礼します。

皆さん、8 年間のご支援本当にありがとう。皆さんとよい思い出をたくさん共有できたことを心底うれしく思っています。

これからの日本支部の更なる発展と、日本の将来を、グローバル世界の日本を創って行く若い内科医たちがもつと、この活動に参加することを期待しています。そして、ACP 年次講演会、支部年次講演会などでも、皆さんとお会いできることを楽しみにしています。

このたび 2 期 8 年にわたって務めた日本支部副支部長を退任させていただきます。

私は 1977 年に Tulane Medicine での研修を終えて American Board Certified の内科医となり、1981 年に ACP Member, そして 1986 年に Fellow に昇格いたしました。当時は少なくとも American Board Eligible でなければ入会できない ACP だったので、日本人会員は数えるほどでした。その後黒川清先生のご尽力により、日本の優秀な内科医の ACP 入会への道が開けましたが、一会員に過ぎない私にとって正直なところ他人事で、Japan Chapter の設立さえ知らなかったほどです。

その設立経緯さえ知らないままに招集を受け、いきなり理事兼副支部長を拝命しました。重荷に感じたものの、未知の可能性を秘めた新しい支部の立ち上げに貢献するという使命感を抱いておりました。当初、理事として副支部長として何ができるのかを模索していました。Committee Chair である他の理事は当然重要な役割を担っています。もう一人の石橋副支部長、次期の小林副支部長は、内科学会や専門医会の重鎮として黒川支部長を支える役目を果たしていました。しかし日本の内科の世界で実績のない私は、ただそこにいるだけの存在に過ぎないかのようでした。

何か役に立ちたいと模索していたとき、支部長会議への代理出席の命を受けました。きわめてご多忙な黒川前支部長は、会期の定められた年 2 回の会議への日程調整が困難な一方、発足間もない支部から不参加を続けるのは好ましくないというのがその理由です。実際に出席してみると、当惑することばかりでした。丸 2 日間の会議で医学的な議題は少なく、米国内の医療に関する政治的な議論が多くを占めていました。すなわち支部長会議でもそこに存在するだけの存在に終始していたわけです。

年 2 回そのようなことを繰り返しているうちに、次第に何かを掴み取り始めました。それは ACP の役員の方や本部の事務系の方々が Japan Chapter に好意的な目を向けながらその動向に注目し、大いに期待していたということです。そして日本支部が力を合わせて精力的に活動し発展し続けていることを生の声で伝えることが、彼らの期待に応える最良の方法であることがわかりました。会議の合間のコーヒブレイクやレセプションも大切なアピールの場と考え、できるだけ多くの方々とコミュニケーションを図りました。

最初の 4 年間はあくまでも Japan Chapter 側の都合による代理出席をしていたわけですが、黒川支部長が前例のない 2 期目の支部長を務めることになった時、当時の支部長会議の Chair であった Dr. Ralston から、「Dr. Kurokawa が多忙で出席が難しいのは理解した。それは OK だが、Ueno を正式の Japan Governor's Representative に任命するので必ず出席するように。」とプレッシャーをかけられました。でも、すでに自分の果たすべき役割を見つけていたので、正式であろうがなかろうが、自ら積極的に年 2 回の会議に出席いたしました。その都度 Japan Chapter の覇気を伝えているうちに、あっという間に 2 期目の 4 年間は過ぎてしまいました。

私なりに考え、私の能力の及ぶ範囲で Japan Chapter の発展に僅かでも貢献できたのではないかと考えております。これにはいつ、どんなときにも心の支えとなっていた黒川前支部長、そしてきめ細かく本部との調整をされた宮本晴子さんのお力によるところが大きいと考えています。そして温かく接して常に力づけてくれた本部の方々にも感謝したいと思います。Japan Chapter は小林新支部長を中心に新しい時代を迎えました。今後のますますの発展を祈念して、退任の挨拶とさせていただきます。

付: ACP Board of Governors Meeting 報告

2011 Spring Board of Governors Meeting は、Internal Medicine 2011 に先立つ 2 日間、San Diego Convention Center で開催されました。いつものように黒川支部長の代理で、と言いたいところですが、今回

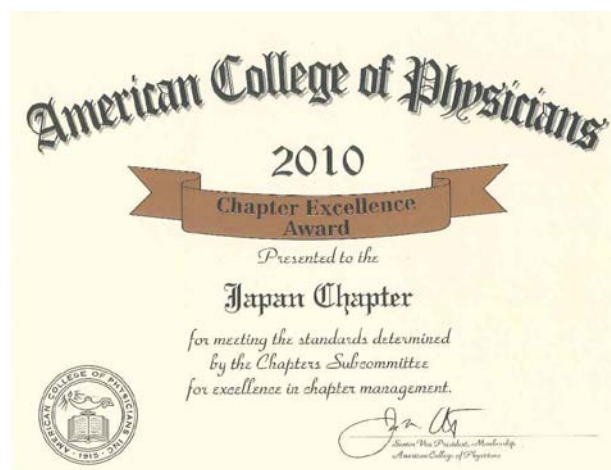
は黒川先生もご出席されました。けれども私自身も任期の最後となる会議で、これまでお世話になった方々へのお礼の挨拶もあり、重複を承知で出席させていただきました。

いつものように朝 7 時からクラス別の会議です。4 年間一緒だった他の Governor たちと再会しました。続いて CEO の Dr. Weinberger による点呼です。今回の震災はアメリカでも大きく報道され、黒川先生と私が呼ばれたときは盛大な温かい拍手で迎えられました。

アメリカ本国の Governor が主として国内関連の会議中、カナダ、中南米、そして日本からの代表はアメリカ国外の問題を討議しました。今回は新しい顔として設立準備中の Saudi Arabia 代表も紹介されました。アメリカ大陸以外では日本に次ぐ 2 番目の支部が立ち上がります。おそらく今後は米国で研修を受けた医師が多いインド、韓国、その他のアジア諸国の支部も開設されるのではないのでしょうか。ACP ガイドラインの翻訳の状況、各国それぞれ事情が異なるメンバーのリクルートの問題などが討議されました。

初日もそうですが、2 日目も全体会議ではやはり米国内の医療事情や財政に関する議題がほとんどです。米国内の Governor にとっては重要な問題で、数多くの決議案が討論を経て修正されて行きました。

会議の最後の Award Luncheon では、順調な成長を遂げてきた日本支部に対し Chapter Excellence Award が授与され、黒川支部長が壇上で拍手を浴びました。最後に今期で退任する Governor 全員が壇上に上がり、感謝の意味で賞状と記念品が授与され、2 日間の会議は幕を閉じました。おまけでしょうが、私まで賞状をいただき、彼らの温かさ感謝した次第です。



Internal Medicine 2011-Convocation / ACP Japan Chapter Reception

Local Nominations Committee 委員長 前田賢司

Convocation Ceremony/International Reception

4 月 7 日(木曜日)の夜、恒例のフェロー授与式(Convocation Ceremony)が行われました。今年は黒川先生もお出でになり盛り上がる予定でしたが、大震災の影響で出席を控える方が多く、日本からの新フェローとしては 3 名だけの参加となりました。(大森史彦先生、川名正敏先生、陰山 研先生)これまでアメリカ大陸以外の支部は日本だけでしたが、今年から新たにサウジアラビア支部が加わりました。今年の新フェローが一番若い人は 31 歳、一番年配の人は 93 歳とアナウンスがあると会場は沸き立ちました。式の途中で支部ごとに立ちあがる場面があり、会場からはそれぞれ自分の所属する支部の名前が呼ばれると拍手や歓声がぱらぱらとあがるのですが、日本の番になり「Japan」という声が上がると日本人参加者が立ち上がると、会場全体からひととき大きく拍手が鳴り響き、しばらくの間鳴り続けました。大きな災害に見舞われた日本に対してのアメリカの人々の惜しみない応援の拍手です。これには、胸が熱くなりました。



引き続き場所を移して国際レセプションにも出席しました。

ACP Japan Chapter Reception

4月8日(金曜日)の夜, 日本支部レセプションが開かれました. 今年は災害の後でもあり, いつものハッピー姿は自粛したのですが, 一部の先生方から「今年はどうしてキモノを着ないのか?」とお尋ねがありました. (「今, 日本はハッピーな状態ではないから」とお答えしたら納得してくださいました.) 今年は日本からは黒川清先生を筆頭に上野文昭先生, 小原まみこ先生, 檜山桂子先生, 川嶋乃里子先生, 日本支部代表として初めて Medical Student Poster Competition に参加された大島聡人さん, それに新フェローの大森史彦先生ご夫妻, 川名正敏先生ご夫妻, それに私の計 11 人が参加, それにアメリカ在住の石山貴章先生, 加藤先生(すみません, 下のお名前が不確かです), 園田圭先生(ハワイ大学)も駆け付けてくださいました. 昨年来て下さった日系の Marvin Hayami 先生ご夫妻(ワシントン州陸軍病院), それに毎年お出で頂いている Takeshi Wajima 先生ご夫妻(テキサス A&M 大学名誉教授), Corky (Kouichi) Tanaka 先生(UCLA ロサンゼルス・カウンティ・ハーバー名誉教授)も来て下さいました. ACP 本部からは現会長の Dr. J. Fred Ralston, Dr. Virginia L. Hood(2011-12 の会長), Dr. David Bronson(2012-13 の会長), Dr. Joseph W. Stubbs(昨年度会長), Dr. Jeffrey Harris(2008 年度会長), Dr. David Dale (2007 年度会長), Dr. C. Anderson Hedberg(2005 年度会長), Dr. William J. Hall(2001 年度会長, 現国際内科学会会長), Executive Vice President になられた Dr. Steven Weinberger, Dr. Yul Ejnes(2011-12 の理事会議長), Dr. Molly Cooke (2009 年度支部長会議長), Dr. Faith Fitzgerald(理事), Dr. Rolf Streuli(前国際内科学会会長, 新マスター), Dr. Hans P. Kohler(国際内科学会 Secretary General), Dr. Linda Snell (Quebec 支部長), 日本支



部年次講演会の「Ichimoku-ryozen」でおなじみの Dr. David Gremillion (student member の Scott という息子さんをお連れになっていました), その他日本でよく知られている Dr. Robert Gibbons, Dr. George Meyer の各先生方(まだまだおられましたが全員はご紹介できません)・・・と大勢の先生方がお見えになりました。今年は檜山桂子先生ご提供の折りヅルと、小原まみ子先生が持参された地震の被災地の救援状況を撮影したアルバムが、お出でになった先生方の目を引いていました。最後に、引退された ACP 事務局の Eve Swiacki さんのスピーチがあり、小原先生から記念のブローチが贈られました。皆さんから愛されてきた Eve さんだけあって、会場全体がいつまでも名残を惜んでいるようでした。日本支部設立にも大きな力となって下さった Eve さんにご場をお借りして改めて感謝の言葉を贈りたいと思います。



Laureate Award

政策大学院大学 教授 黒川 清先生

The Laureate Award honors Fellows or Masters of ACP who have demonstrated by their example and conduct an abiding commitment to excellence in medical care, education, or research, and in service to their community, their Chapter, and the American College of Physicians.

黒川清先生は日本支部設立に大きくご貢献され、初代 Governor を異例の 2 期(日本支部にだけ許された特例)、2003 年～2007 年、2007 年～2011 年お務めになりました。黒川先生の Leadership の基、日本支部は設立当初約 400 名だった会員が現在は 1,000 人を超える人数となりました。支部長というお立場でいらっしゃるが、研修医や学生のイベントにも積極的にご参加され、上下関係を感じさせない接し方をされるので学生にも大変慕われていらっしゃいます。

日本支部への多大なご貢献に感謝したいと存じます。

Volunteerism Award

☆日本赤十字広島看護大学 宇野久光先生

宇野久光先生は、介護老人保健施設での医師としての勤務経験から、超高齢化社会の我が国において予防医学としての抗加齢医学が重要であると考えられました。それは、生きがいと健康寿命という個人の幸福と医療経済という社会的要因の両面から、重要と考えられました。

この観点から、平成 20 年に広島抗加齢医学研究会を設立し、現在まで会長として活躍されています。

この広島抗加齢医学研究会では、医師、歯科医師、看護師、薬剤師などの医療従事者に対して、抗加齢学の普及に努められました。

また、講演会や FM 放送を通じて、地域住民への正しい抗加齢医学の普及にも努められました。

医療従事者や地域住民に対する研究会や講演会の準備は、ビラの作成から会場の設営までのほとんどを宇野先生がほとんど一人でされています。毎回赤字ではありますが、ボランティア活動として継続しておられます。

加えて広島抗加齢医学研究会での活動の他にも、ACP Publication Committee 委員としての活動も多くされています。2005 年からは Observer Weekly の翻訳活動に関わり、さらには 2007 年から Annals of Internal Medicine の翻訳に関わっておられます。

また、同委員会の副委員長、委員長として、現在まで活動されています。

このように ACP の Volunteerism 精神に合致した活動をされてきており、このたび Volunteerism Award を受賞されることになりました。

☆Hiroshi Bando, MD, PhD, FACP

きたじま田岡病院/徳島大学 板東 浩先生

板東浩先生は徳島大学をご卒業後、ECFMG資格を取得され米国 family practice residency program で臨床研修されました。内科専門医会(現部会)においては、広報や学術を担当され、2010年4月からは日本内科学会専門医部会・四国支部長として、地方会と専門医部会との協調関係を構築されました。また日本プライマリ・ケア(連合)学会では、国際交流委員長、広報委員、副委員長を歴任され、現在も広報委員長として学会運営に携わっておられます。

先生はピアニストそして音楽療法士としての一面も持っておられます。日本バイオミュージック学会第20回学術大会長、日本音楽療法学会四国支部長として第9回学術大会長を開催され、日本統合医療学会では音楽療法部門担当者と四国支部事務局長を兼任されました。聖路加国際病院の日野原重明先生が主宰される「新老人の会」の徳島支部代表世話人として地域社会で健康や文化の啓発活動もされておられます。この他にも医学原著や総説、健康関連記事、芸術文化のエッセイなど出版物は1,300点以上、ピアノ演奏や講演活動は600回を超えておられます。

また、スピードスケーターとして冬期国体に参加されるとともに、日本ローラースケート協会や徳島県体育協会での医療サポートもされています。さらに、教育講演活動、ラジオコメンテーター、TVの健康番組への出演など、多彩な活動をなされておられます。

なお、ACP日本支部ではPublication Committeeの委員として翻訳に長く関わられ、本年度はWomen's Committeeの委員を担当され積極的に活動していただいております。

板東浩先生の一医師の領域を超えた広範囲にわたるご活躍はACPのVolunteerismを具現化したものといえるでしょう。

連絡事項

事務局からの連絡方法について

ACP日本支部事務局からのご連絡はE-mailにて行っております。連絡がつくメールアドレスをお知らせいただきますよう、お願い申し上げます。尚、各種メーリングリストからの登録削除やアドレス変更がある場合には事務局までご一報ください。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

ACP日本支部事務局 (担当 宮本晴子)

〒113-8433

東京都文京区本郷3-28-8 (社)日本内科学会内

Tel: 03-3813-5991

Fax: 03-3818-1556

E-mail: acp@naika.or.jp

Web site: <http://acpjc.naika.or.jp>

